



「安樂死」「尊厳死」最近そういう言葉を目にすることが多くなった。当然のことだが人は誰でも必ずいつかは死ぬ。しかし、具体的に自分の最期を考えている人は決して多くはない。

笑顔で答えて…

私が八十四歳になる女性の中森さんに初めてお会いしたのはこの診療所に赴任してきた二年ほど前になる。不正出血から見つかったご自分の病気が根治不能な子宮頸(けい)がんであることを知つておられた。前任の先生から、現在のところ積極的に治療をされる予定は

ない、と聞いてはいたが折をみて尋ねてみた。

「中森さん、子宮の方の病気までいっぱいほかの病気で入院もう入院はええです。これ

はしてきたから」となんともいえぬ笑顔で答えられた。

いたし、往診させていただけて、ゆつくり話もでき、

いたので、ゆつくり話もでき、大変お互いにとってよいことであつたと思う。

しかし、一年を過ぎたころから頻回に出血が起こるようになり、貧血の治療を行わなくてはいけないような状況になつた。

鉄剤の注射(貧血の治療のため)で何とかしのいでいたが、それだけではどうにも難しくなり、ついに出血のコントロール目的での入院を勧めることになつた。

それから数カ月、残念ながら出血が止まることはなく、思うように家の中も歩けない、と

いう日もあつた。しかし、中森さんは最後まで家で過ごされ、ご家族に見守られながら穏やかに息をひきとられた。

本当によい医療、みどりができたのか? 患者さんが亡くなられた後、いつも心をよぎる思いである。時には自信を持つて、時には後悔を交えて…。

この時のこと振り返つてみると、心の中の中森さんが「にこつと」笑つてくれたような気がした。

亀田 直毅 23期生・2000年卒



国保甲奴診療所の正面玄関

広島県三次市国保甲奴診療所

【私の勤務地】広島県の県北に位置する三次市甲奴町にある無床の診療所。常勤医師は1名。診療圏は主として旧甲奴町の人口3100人あまり。近年は、自治医大の卒業生が2—3年ずつ勤務している。

よい医療できたのか、自問

自信と後悔交え

拒否されるのを覚悟の上でその話を切り出したのだが、意外にもあつさり「じゃあ、そうしましよう」と言われ、ほつとたような、寂しいような気持ちで総合病院の婦人科の先生へ託した。

(次回予定は愛媛県)